

全身疾患と眼：新しい疾患概念による 眼科診療の新展開

*Eye Disease Related to Systemic Disorder : New Treatment Consensus Arising
from Recent Disease Criteria*

園田康平* 山下英俊**

全身疾患と関連のある眼科疾患の診療では、全身状態を把握し、全身因子を含めて対処することがきわめて重要である。近年の医学の進歩により疾患概念や治療戦略が大きく変化している疾患をまとめたうえで、診療ガイドラインも踏まえながら眼科医として知っておくべき事を整理しておく必要があると考え、今回の特集を企画した。本特集では、とくに日常診療において遭遇する可能性の高い疾患への対処について最新の知識を提供することを念頭に組み立てを行った。

糖尿病網膜症は、失明に直結する増殖網膜症のマネジメントがよくなり格段に視力予後が改善した。OCTの普及により早期に黄斑浮腫が診断され、抗VEGF治療により多くのケースで良好な視機能が温存できるようになった。一方、抗VEGF治療に抵抗する症例が存在することも明らかになり、その同定と個別化医療が次のテーマとなっている。最新の網膜症と全身因子関連の知見を、東京女子医科大学糖尿病センターの佐伯忠賜朗先生、北野滋彦先生に解説いただいた。

IgG4関連疾患は、IgG4陽性形質細胞の浸潤によりさまざまな臓器に不調を起こす疾患である。わが国から包括的診断基準が報告され、近年眼病変に対する診断基準も整備された。この分野の第一人者で

ある東京医科大学の後藤 浩先生に鑑別診断や治療方針を含めて解説いただいた。

アクアポリン4抗体関連視神経疾患は臨床像が明らかになり、抗体検査が一般化されたことで広く認識されるようになった。特発性視神経炎の10%に本抗体が陽性で、高率に視神経脊髄炎に進展することから、その病態治療をきちんと理解しておくことが求められる。兵庫医科大学の木村亜紀子先生にまとめていただいた。

ベーチェット病は未だ原因不明の難病であるが、好中球が異常に活性化される「自己炎症疾患」であることは間違いない。近年自己炎症疾患に対して概念が整理され、リンパ球が優位である「自己免疫疾患」と区別して考えられるようになってきた。抗TNF治療が劇的な予後改善をもたらしており、その早期診断と治療導入時期について適切な知識が求められる。大阪大学の橋田徳康先生にわかりやすく解説していただいた。

炎症性腸疾患、強直性脊椎炎、皮膚炎症疾患では、しばしば急性前部ぶどう膜炎を合併する。急性前部ぶどう膜炎は近年の統計ではぶどう膜炎原因疾患の上位にすることが多く、診断と治療の多様性を理解しておく必要がある。山形大学の金子 優先生、神戸大学の楠原仙太郎先生、山口大学の内 翔

* Kohei Sonoda : 九州大学大学院医学研究院眼科学分野 ** Hidetoshi Yamashita : 山形大学医学部眼科学講座

平先生、柳井亮二先生に各疾患の特性とぶどう膜炎の特徴を踏まえた治療について、解説していただいた。

悪性リンパ腫はさまざまな病型を呈するが、転移性のリンパ腫もあれば眼原発の場合もあり、全身科と密接に連携をとりながら治療を進める必要がある。なかでも仮面症候群の代表である眼内悪性リンパ腫は、近年早期発見・早期積極治療が行われるようになり著しく視力予後・生命予後が改善した。高齢者の原因不明ぶどう膜炎に対する対応も併せて、九州医療センターの武田篤信先生に解説していただいた。

今回の特集によって、全身因子が密に眼疾患の診断と治療に関連する疾患の診療における眼科の役割を明らかにし、めまぐるしく変化する（内科、皮膚科、整形外科など）関連診療科との診療連携について、必要な知識をわかりやすくまとめることができたと思う。連携診療科からの紹介状・返書のやりとりにも、本企画を役立てていただければ幸いである。眼は生体現象を直接観察できる唯一の臓器であり、眼科的所見が全身病診断のきっかけになることも多い。「眼は全身の窓」であり、眼科診療は患者の全身治療にも繋がっていることを、眼科医自身肝に銘じて診療に当たる必要がある。